

下布田遺跡のプレゼンスをリードする陶芸家

今回の活躍人は、布田小近くのご自宅で陶磁造形の作家として、アーティスト活動をされている安川万里子さん。ただ、布田小に通学されている二人のお子さんの保護者として、あるいは地域の活動に参加される時には反迫（たんさ）さんのお名前前で活躍されておられるので、ちょっと珍しいそちらのお名前でご存じの方が多くかもしれない。当記事では、アーティストとしての側面からご紹介したいので、安川さんと呼ばせていただく。

福岡県で生まれた安川さん、高校生の時に図書館で偶然目にした、沖縄県八重山諸島の新城島（あらぐすくじま）に伝わるパナリ土器に魅せられてしまった。粘土に貝殻の粒を混ぜて成型した、素朴な形に惹かれたばかりではなく、約二百年ほど前までは作られていたのに作り手が途絶えてしまい、幻の土器と呼ばれていることにもロマンを掻き立てられたに違いない。

今のようにならなくてもインターネットで検索できる時代ではなく、図書館中を探し回ってもほとんど情報を得られなかったが、唯一沖縄県立芸術大学の大嶺實清（おおみねじつせい）先生という方がパナリ土器について研究されていることが分かった。それから安川さんの決断と行動力は、とても高校生とは思えない。進学先は沖縄芸大！そして入学前でも出来ることはやっておきたいと、西表島（いりおもてじま）で現在も作陶を

地域の活躍びと

安川 万里子 さん

（やすかわ まりこ）



～ 陶磁造形作家 ～

されておられる高山宗久さんを訪ねて、高山ご夫妻の元で土器作りを始めたのだ。

そして芸大受験。なんと受験面接を大嶺先生が担当して下さい、もちろん合格。しかし大嶺先生は直後に退官されたため、直接パナリ土器についての教えを受ける機会がなかったのは、やはり今も心残りですと安川さん。それでも後継の先生方や高山宗久さんの指導と支援の下、民俗学の視点から新城島の現地調査に何度も出かけられたそ

修了後、母校の陶芸コースの非常勤講師を務められていたが、ご主人の仕事の関係もあり上京、最初は中野に住まわれて近隣の古屋眞理子さんの工房で制作を続けられていたが、2021年に現在のお住まいに移られた。インターネットで訪問させて頂いたのは、ご自宅前のガレージを改装した工房なのだが、前の持ち主の方が既に作られていたとお聞きしてビックリ。焼成用の電気窯こそ転入後に設置されたものの、まるで安川さんが移って来られるのを待っていたかのような、陶芸作家にピッタリの造りなのだ。近くに下布田



ろくろを回す製作中の安川さん



最後に2023年に日本文化振興プロジェクトで安川さんが優秀賞に輝いた作品「纏い（まとい）」について。展示会に回っているため、作品そのものを見せて頂くことは叶わなかったが、同じ「纏い」という細やかな技法を使った作品をいくつか拝見した。美しく繊細な磁器の素晴らしさは言葉では言い尽くせないのと同じく、素敵な造り手についてもなかなか書き尽くせない。

（取材・藤田秀雄）

えって待っている間のおしゃべりを楽しんでいる風情だ。

考えてみればほとんどの来場者は全員、あちこちの遊園地やテーマパークで、本格的な食べ物やイベントの経験があるはず。それでも布田小の夏祭りがカレンダーに印を付けておくほど楽しみなのは、日常の中に突然作られた非日常の空間が楽しいんですよ、とこれは会場でお話を伺った先生の意見。なるほど、昨日授業を受けていた教室が、今日はお化け屋敷に変身していて、ヌーと出てきたお化けに友達と一緒にキヤーと叫んで大騒ぎをするのは、テーマパークでの楽しさとは別物ですね。

帰り道、もう一つの大切な要素に気が付いた。同じ方向に帰る夏祭り帰りの親子連れ二組、一人のお母さんが着ているTシャツの背中にI♡FUD Aの文字。そう言えば会場でも来場者やスタッフに、同じTシャツを着ている方を見かけた。やはり自分が住んでいる、この布田地区が好きな人達が集まるお祭り、というのとは子ども達も大人も和やかな気持ちで楽しめているに違いない。



体育館



STAGE



ロータリー



お化け屋敷



アルカイック的な文様と
淡い色彩の陶器作品

遺跡があり、縄文土器が発掘されていることを知ったのも転入後のこと。少し大げさだが、安川さんはこの地域に移って来る運命であつたようにさえ思えた。

その後安川さんが、布田小の外委員や当地区協主催のハッピーウォークなどのイベントを通して地域活動、とりわけ専門分野の土器・民俗学に関連した活動に携わることができるのは自然の成り行き。当紙20・21号でご紹介した郷土博物館の立川さんとも、色々な場面で交流されている。今後も下布田遺跡をはじめ、安川さんの知識・経験が役立つような機会があれば、喜んで参加していきたいと言っている。